

人間関係づくりの授業で、教師は子どもにどうかかわるか

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-10-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石田, 純夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00006856

人間関係づくりの授業で、教師は子どもにどうかかわるか

石田純夫*

How Teachers Get Involved in the Class
with Making Human Relations ?

Sumio ISHIDA

要 旨

人間関係づくりの授業で、教師の子どもへのかかわり方について振り返る。具体的には教職大学院生徒指導支援領域授業科目「子ども同士の人間関係を育むグループアプローチの開発」の一環で、公立小中学校や附属校で院生や大学教員によって実践された授業を振り返ることにより、教師の子どもへのかかわりについて検証する。

キーワード 人間関係づくりの授業 公開授業 教師の自己開示 現職院生 学部卒院生 修了生

1 人間関係づくりの授業について

(1) 人間関係づくりの今日的な要請

現在の多くの子どもが、人とふれ合う体験不足から対人関係力が低下していると言われている。このような状況下、子どもが人間関係能力を身につける場や機会を学校が意図的・計画的に設けるようになってきている。そこで有効とされるのが、人間関係づくりの授業である。この重要性については、小学校学習指導要領解説・特別活動編(平成20年8月)でも次のように記述されている(表1)。

(表1) 小学校学習指導要領解説・特別活動編

第4章 指導計画の作成と内容取扱い
第2節 内容の取扱いについての配慮事項
1 学級活動、児童会活動、クラブ活動の取扱い
(4) 人間関係を形成する力を養う活動を充実させること
(中略)
なお、特別活動の各内容の特質に応じて、例えば「意図的にあるグループ作業を行わせ、ここで感じたことなどを率直に話し合うことにより人間関係を形成するために大切なことを理解させる手法」や「人間関係を形成するための基本的な知識や方法などについて、ロールプレイングやグループで練習をするような手法」を効果的に取り上げることが考えられる。

(2) 静岡大学教職大学院での取り組み

ア 授業科目として

本教職大学院でも、「子ども同士の人間関係を育むグループアプローチの開発」という授業を設定し、学校現場での実践を振り返りながら、特に「授業の中での教師のかかわり」について検討してきた。

具体的には、生徒指導支援領域院生全員と大学院担当教員が附属学校と公立小中学校(滞在校、連携協力校)で人間関係づくりの授業を行い、お互いで

見合い、振り返りながらその特徴や構造を理解し、授業実践力を高めることを目的とした(表2,表3)。

(表2)平成21年度 学校における公開授業研究実践

校 種	院生の授業数	教員の授業数
公立小学校	4	1
公立中学校	4	11
高等学校	0	0
静附中学校	11	12
計	19	24

「教員」は筆者、静附中3回は非常勤講師
日常の授業実践は除く

(表3)平成22年度 学校における公開授業研究実践

校 種	院生の授業数	教員の授業数
公立小学校	3	2
公立中学校	4	9
高等学校	0	2
静附中学校	10	12
計	17	25

平成22年度3月までの予定を含む

「教員」は筆者、静附中3回は非常勤講師
日常の授業実践は除く

イ 附属校、滞在校等での授業実践

滞在校では、M1・M2の院生、大学院教員が観察者となり、全員のM1院生が1回の公開授業を行った。学校教員も自由に参観できるようにし、どの滞在校からも指導案作成段階より積極的な協力を得た。また、公開授業の前後に多くの授業実践を実施する機会も与えられた。M2が授業公開をする機会も多く設けることができた。

一方、附属静岡中学校の3年生対象の選択授業では、前期は大学教員やM2院生による授業を毎週実施した。M1院生は中学3年生とともに生徒として授業に参加し、生徒の立場を体感した。その上で後期はM1院生が1回ずつの授業実践をして全員で観察し、振り返った。

滞在校、附属校授業の振り返りでは、参加者は授

* 教育実践高度化専攻

業の難しさを知っている者同士であったため、互いが共感的に授業をとらえ、且つ厳しい指摘や代案が報告され、有意義な事後検討会となった。

大学教員の授業実践は、修了生や授業実施校の教員とのTTを原則として実施され、実施校にとっても有効であるよう配慮した。また、平成22年度は新たに高等学校での実践を取り入れ、校種の幅を広げた。

このように参加者自らが授業を行い互いに評価し合うことで、相互啓発の場が保証され、授業内容は次第に工夫されていった。また、学卒大学院生が実施する授業に現職教員が刺激を受けて教師としての原点を見つめ直すことにつながるなど、参加者相互の影響を受けて授業力向上につながった。

2 「教師が子どもにどうかかわるか」について

人間関係づくりの授業では、その展開例やエクササイズ等はよく語られているが、「教師のかかわり方」についてはそれほど言及されていない。しかしながら、授業を通して子どもを理解し、指導支援を行っていくという立場に立つならば、授業の中で教師が子ども達にどのような姿勢や関心、意図を持ってかかわったのか、子ども達の反応を受けてそれらがどのように変容したのか、しなかったのかなど、教師のかかわりの側面についても授業を評価する観点として重要であると思われる。そこで本授業科目では、教材内容や展開方法だけでなく、下記のような視点についても留意した。

(1) 一貫して「教師がどうであったか」を語り合う。そのために必要な範囲で、子どもについて語り合う。

授業実践の事前には授業展開の検討を、また事後は授業実践校で振り返りを院生全員と教員とで行った。特に事後の話し合いでは、「教師がどのような立ち位置でいたか」を中心に話し合った。具体的にはそれぞれの段階で、教師の子ども達とのかかわりの姿がどうであったかを話し合った。

(2) 授業者の個性がどう活かされていたかを振り返る。

実践する授業では、授業者の持つ「自分らしさ」を授業に活かすよう院生に伝えた。授業者の個性が授業の雰囲気にもどのように影響したのかを振り返るようにした。

(3) 教師と子どもと教師と子ども達の間を振り返る。

授業での教師、子どもの関係を「教師」「子ども」「その他の子ども達」の3つに分け、三者のトライアングルによってやりとりが進行していくと考えた。

事後では、このトライアングルの関係がどうであったかを振り返りながら、教師のかかわりについて話し合った。

3 実践事例

上記の視点で、院生や教員による授業を互いに見合い、事後に話し合った。ここで、5つの授業実践例を挙げて「教師の子どもへのかかわり」がどうであったかを振り返ってみる。

【事例①】

M2学部卒院生と学級担任による公立小学校4年生学級での実践事例

ア 授業のテーマ：安心感

イ 授業のねらい：

自分と他人を見つめる場を意図的に設定し、意識的に児童同士を自己表現をさせながらかかわり触れ合わせることで、他者とかわることの心地よさを味わせる。

ウ 授業シーン：

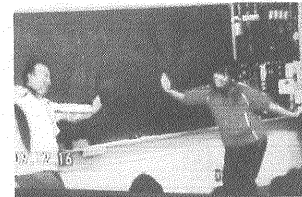
- ① 子どもとの自然なやりとりで始まる導入場面(図1)
- ② 学級担任と授業者でのデモンストレーション(図2)

(図1) 導入場面



導入前の子どもとのやりとりを十分な時間をかけて行い、またフィジカルな工夫で子どもをひきつけ自然に導入に移っていった。

(図2) 学級担任とのデモンストレーション



教師二人の思い切った動作。子どもたち一人一人に笑顔が見られた。

エ 振り返り：

授業者の、子どもへのかかわりの巧みさが際だった授業であった。特に導入段階における授業者のフィジカルなアプローチ(図1)が子どもを引きつけ、子ども達が興味・関心をふくらめながら展開されていた。この授業で特筆したいのは、授業者が導入や終末で、フィンガータッチによるフィジカルなエクササイズを時間をかけて実施したことである。事後検討では、指の動きという細かな身体動作に子ども達の視線を集中させ、教室内の雰囲気を急速に落ち着かせたところが優れているとの意見が出された。

また、学級担任とのデモンストレーションでの授業者と学級担任の掛け合いは絶妙で(図2)、子ども達の楽しげな表情が印象に残ったとの発言もあった。こうした雰囲気づくりや子どもたちの授業への積極的なかかわりを生み出すためには、授業者の柔和な

表情が重要な条件であることが示唆される。

【事例②】

M2 現職教員院生による附属静岡中学校3年生
選択授業での実践事例

ア 授業のテーマ：私の人生に影響を与えた〇〇

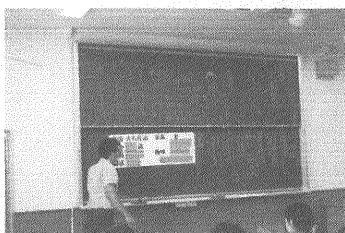
イ 授業のねらい：

現在の自分に影響を与えてきた「もの」を考える活動を通して、自分自身を見つめ直すと共に、伝えることで自らの思いを明確にする。

ウ 授業シーン：

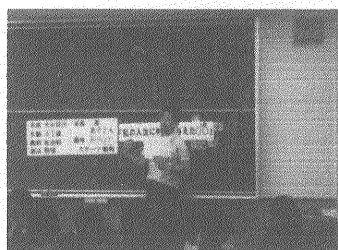
- ① 自分のことをクイズで紹介する自己紹介場面(図3)
- ② 導入から展開場面(インストラクション)に繋げる。(図4)

(図3) 自己紹介



自己紹介で、いきなり家族や趣味等を伝える教師の姿勢に、子ども達は緊張感を和らげ、授業は柔らかな雰囲気で行った。

(図4) 展開説明



自己紹介から、さらに説明しながら上手に導入・展開に繋いでいた。

子ども達も教師に感化されるように自然に本時の課題をつかんでいた。

エ 振り返り：

何よりも授業者自身の自己紹介を導入に使い、じっくりと子どもと対話をしたことが、この授業の特徴の1つである。自己紹介だけで20分かかったが、子ども達は興味強く聞き入り、また反応していた。

自己紹介の中に「影響されたもの」が用意されており、子ども達は自然に本時課題に取り組んでいた。

ゆったりと、子ども達と会話をしながら授業をす

めるところに授業者の個性があり、子どもとの一体感をもたらす重要な条件であるとの指摘が振り返り会の中で出された。

【事例③】

大学教員(筆者)と学級担任による小学校5年生
学級での英語授業実践事例

ア 授業のテーマ：

Practice your Gestures with your Partners

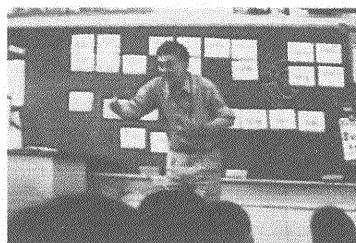
イ 授業のねらい：

形容詞のジェスチャーが何を表しているのか、当てる活動を通して英語で表現することに慣れる。

ウ 授業シーン：

- ① 導入時の、授業者と子ども達との一体感(図5)
- ② 学級担任と授業者とのデモンストレーション(図6)

(図5) 導入時の発音プログラム



導入時の、英単語を使って発音を楽しく学びながら子どもとの一体感づくりを進めた。

(図6) 学級担任とのデモンストレーション



学級担任とともに、英語ゲームの説明をしている。担任も精一杯自己表現をしている。

エ 振り返り：

英語を題材にした、人間関係づくり授業実践例である。授業者は導入段階で、如何に子ども達を引きつけるかを授業のポイントとして授業に臨み、まず授業者と学級担任が身体全身で動作をして子ども達に方法を示した。展開では、動作を通して英単語を表現させた。教師のインストラクションが分かりやすかったため、子どもは興味深く動作化に取り組んだ。

**【事例④】
大学教員と学級担任による公立中学校2年生学級
での実践事例**

ア 授業のテーマ：伝え合う心地よさ

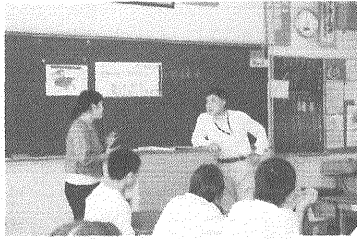
イ 授業のねらい：

グループエンカウンターの手法を使い、生徒と生徒、教師と生徒とが伝え合う場面を設定した。生徒個々が「伝え、聴く」体験をすることで、自己開示と傾聴の心地よさを体感する。また、本校研修テーマである「表現しあう力」を高める一助とする。

ウ 授業シーン：

- ① 導入における子どもとのやりとり (図7)
- ② 終末場面での学級担任による自己表現 (図8)

(図7) 導入のやりとり



導入時の、学級担任とのやりとりであるが、実際には子ども達とのトライアングルのやりとりをしているところであり、和やかな雰囲気のもとで全員が話し合いに参加していた。

(図8) 学級担任の自己表現



終末時の学級担任による自己表現である。子ども達の、学級担任を見る表情から、子ども達が安心して学級にいることが確認できた。

エ 振り返り：

授業開始から導入への、子どもと教師のやりとりの心地よさを、授業者自身が体感できた授業であったという指摘が多かった。

また終末での教師説話時の、子ども達の表情から、学級担任への信頼感と学級経営の中での安心感が保証されているのがよく読み取れた。

**【事例⑤】
院修了生と大学教員(筆者)による修了生赴任
の公立中学校3年生学級での実践事例**

ア 授業のテーマ：五つの自分

イ 授業のねらい：「エゴグラム」を活用して自他が自分を語り合うことで、個々が自尊感情と他者への肯定的感情を体感する。

ウ 授業シーン：

- ① 子どもとの活発なやりとりの導入 (図9)
- ② 子ども達の学級担任評価 (エゴグラムによる) (図10)

(図9) TTで導入



修了生とTTでの導入場面である。子どもがとても活発であった。

(図10)子ども達の担任評価



学級担任のエゴグラムを子どもがつくり、担任が自己評価しているところである。

エ 振り返り：

生徒指導上の問題があると聞いていたが、本学修了生である学級担任の、受容的な学級経営や安心した雰囲気によって楽しい授業になった。学校全体の雰囲気はよく、教師と子ども達の距離の短さを感じた。

4 「教師の子どもへのかかわり」を振り返る

今までの全ての授業実践を振り返り、人間関係づくりの授業での「教師の子どもへのかかわり」はどうであったのかを検討した。また、そのための素材として、(1)平成21年度に修了した院生6名による座談会記録、及び(2)「教師の子どもへのかかわり」をテーマとする院生・現場教員を対象とする自由記述調査の2つを用いた。

(1) 院生座談会記録より

平成22年3月に、昨年度M2院生6人による座談会を行い、それぞれの実践を振り返りながら「教師の子どもへのかかわり」について話し合った。

以下は、3カ所の座談会での、院生が主張してい

た意見の要旨である(表5)。

(表5) 座談会の要旨

<p>★ 座談会 I …「出会い」から「導入」</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 学部卒院生の1さんは素で子どもとかかわろうとしている。 ○ 子どもの中に飛び込んでいく。 ○ じっくりと時間をかけて子どもとかかわろうとしている。 ○ 出会った時の自分と子どもを大事にする。教科の授業でも同じである。 ○ 出会いはいつもフレッシュである。 ○ 要は「自己開示」である。
<p>★ 座談会 II …「導入」から「展開」</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 導入から展開が難しい。 ○ エクササイズの説明が難しい。どうしても全部伝えなければと思ってしまう。 ○ わからせようとするとき長くなり、子どものモチベーションが途切れてしまう。 ○ やり方の輪郭がわかれば、あとは子どもとのやりとりでわかっていく。 ○ 導入での子どものモチベーションによって展開は違ってくる。 ○ 子どもから「何やるの?」と言ってくるくらいやりとりができればと思う。 ○ 教師と子どもの、言葉のキャッチボールが大切な場面である。
<p>★ 座談会 III …全体を通して</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 子ども達は、「自分がうまく行かない。」と思った時に助けてくれる。そういう授業が、子どもと自分との関係を深くしてくれる。教科授業も同じである。 ○ 子どもへの謙虚さが原点である。 ○ 自己開示して恥をかいていると、子どもが応えてくれる。 ○ 教師が楽しくやっていると、子どもが応えてくれることを実感した。 ○ 授業実践を通して、自分自身が変わった。「先生である」という殻がとれた。 ○ 自分がすごくうれしいことは、子どもにとってはもっとうれしい。それをもりに出せるのがエンカウンター授業である。 ○ 恥でも格好悪くても信じて飛び込んでいく勇気を得た。 ○ 教師が自分を出すきっかけになったのが「グループアプローチを使った授業」である。 ○ 大人しい教師が自己開示し変化する姿に驚いた。 ○ 小学校より中学校の方が自己開示し易い。 ○ 教師の自己開示によって子どもが感化され、感化された子どもの自己開示によって教師が助けられ、その繰り返しが結果的に1つの授業をつくっていく。

座談会を通じて指摘されていたのは、次の5点である。

- ア 「子ども」ではなく「教師」の問題である。
- イ 教師の自己開示が大事である。
- ウ 教師の謙虚さが大事である。
- エ 日々の出会いを大切にしたい。
- オ 教師の自分らしさに子どもは感化される。

これらのコメントは、学部卒院生を含めた6人の一致した印象であった。

(2) 院生・現場教師対象調査より

平成22年12月初旬に、「教師の子どもへのかかわり」について、人間関係づくりの授業を経験している、本院修了生、現職大学院生、連携協力校教員へのアンケート調査を実施した。(回答24人)

そこで授業の各段階、①導入 ②展開 ③終末 ④全体を通してに分けて、「教師の子どもへのかかわり」について聞いてみた。その主な回答である(表6)。

(表6) 院生・現場教員対象の調査から

<p>(下線部は、筆者による)</p>
<p>① 導入</p> <p>ア 徐々に緊張がほぐれていく段階。<u>教師と子どもが呼吸を合わせていくことが重要。</u>(現職1年)</p> <p>イ <u>教科の授業とはちょっと違う雰囲気を出す事が難しさであり面白いところである。</u>(修了中学校教員)</p> <p>ウ <u>子どもの興味やその時期の表れにどこまで教師側が近づけるか。子どもがやってみたいと思えること、楽しいと感じられること、何故か引きつけられること、そんなモチベーションをどう引きだせるか。</u>(修了中学校教員)</p> <p>エ <u>自己開示の手段、方法が知りたい。</u>(学部卒2年)</p> <p>オ 子どもをいかにして引きつけるのか、工夫が必要。<u>まずは教師自身の自己開示かな。</u>(現職1年)</p>
<p>② 展開</p> <p>カ 気になる子へ、どのようにアプローチするか迷う。(多数)</p> <p>キ ルールの説明、徹底に大変気を遣う。(多数)</p> <p>ク ある程度決められた枠の中で、やれる環境をどのように設定するか。グループの人数、時間、順番、ルールなど。自由と強制のバランス。(修了中学校教員)</p> <p>ケ <u>ただ楽しいで終わらせるだけでなく、自然と自分自身のことを表現してしまったという気持ちにさせる手立ては、なかなか難しい。</u>(現職2年)</p> <p>コ 生徒のあらわれによって予定どおりすすめていいのか、変更したほうがいいのか、自分の引き出しを一番問われる部分だと思う。<u>生徒に助けられるのもこの段階であるとも感じる。</u>(修了中学校教員)</p>
<p>③ 終末</p> <p>サ <u>教師らしくきれいにまとめようとして、教訓のようになってしまう。</u>(多数)</p> <p>シ 形式的なことではなくて本音で子どもに語ることで<u>授業者の思いが伝わる。自分の言葉で正面から語るこ</u></p>

とができるかが、大切であると思う。(現職2年)
 ス 何かをわからせる、教える、というスタンスが強いと最後に興ざめる感じがしてしまふ。教師としてよりも一人の人間として感想を述べるという感覚なら、なんてことはない。(修了中学校教員)
 セ 子どもたちの活動の様子を教師がどのように見て、そこから何を感じて、自分の心の中でどのような変化が起こったのか。それをありのままに伝えればよい。でもなかなかできない。(修了中学校教員)
 ソ オープンエンドで終わる時の一言や子どもの振り返り後の一言をどうしめくくるのか、悩みます。(現職1年)

④ 全体を通して
 タ 最近「僕は」といった立場で生徒に話をすることが以前より増えている。謝ることも構えずに、照れくさいという言葉も自然に。生徒に要望する前にこっからでしよというのが普通に思っている自分がいる。(修了中学校教員)
 チ 成長の未熟な子ども達にも本音で語らせるのではなく、まずは教師自身が自分を開き、本音で子どもたちと対峙していく姿勢が大切だと思います。教師が本当の自分をまず出すことで、子どもとの信頼性が生まれてくると思う。(修了小学校教員)
 ツ 授業者が安心感をもって授業をしている雰囲気子どもに伝わるのが大切だと思う。(修了中学校教員)
 テ 子どもの心が開放された時にはじめて自分の考えが言えたり学んだ事が子どもの中に吸収されていく感じがする。逆に教師も肩の力が抜けた時に、子どもの本当に伝えたいことが聴けたり子どもの表れに気づいたりできるようになると思う。(修了中学校教員)
 ト その人がそのことについてどのように感じているかを、相手に伝えることが大事だととらえています。それを相手に示すと相手も自分の気持ちを伝えようとしてくれるように思います。(現職1年)
 ナ 目立つパフォーマンスをしたり秘密を明かしたりすることだけでなく自分の感じていることを素直に自分の言葉で語ることが出来るのが大事だと思う。(M2学部卒)
 ニ 「教師」は上から目線、「先生」は人として先に生まれた人。立場で関わっては、子どもとの心のかかわりはできないと思っています。(現職1年)

調査回答から、院生の主張をまとめてみると、

- ア 授業のどの段階でも、教師自身の子どもへのかかわりは大切である。
- イ 教師の姿勢や雰囲気子どもに伝わり授業をつくる。
- ウ 教師の自分らしさが子どもの本音を導く。
- エ 「教師」という立場から「自分」という立場でかかわることが大事である。
- オ 教師が自分を開き子どもと対峙する姿勢が大切である。

等に整理できる。

(3) 院生座談会、院生・現場教師対象調査を振り返って

今までの全ての人間関係づくりの授業実践を振り返りながらの、平成21年度に修了した院生6名による座談会記録及び「教師の子どもへのかかわり」をテーマとする院生・現場教師を対象とする自由記述調査の2つから、共通した意味の指摘があることがわかる(表7)。

(表7)座談会、院生現場教師調査に共通した意味の言葉(抜粋)

ア 素で子どもにかかわる。
 イ 教師が楽しくやると子どもが応えてくれる。
 ウ 「うまくいかない」と思った時に子どもは助けてくれる。
 エ 「先生」であるという殻がとれた。
 オ 本音で子どもに語ることで授業者の思いが伝わる。
 カ 教師としてよりも一人の人間として感想を述べる。
 キ 謝ることも構えずに、照れくさいという言葉も自然に。
 ク まずは教師自身が自分を開き、本音で子どもたちと対峙していく姿勢が大切。
 ケ 教師が本当の自分をまず出すことで、子どもとの信頼性が生まれてくる。
 コ 授業者が安心感をもって授業をしている雰囲気子どもに伝わるのが大切。
 サ 教師も肩の力が抜けた時に、子どもの本当に伝えたいことが聴けたり子どもの表れに気づいたりできるようになる。
 シ それを相手に示すと相手も自分の気持ちを伝えようとしてくれるように思う。
 ス 自分の感じていることを素直に自分の言葉で語ることが出来るのが大事。
 セ 「教師」は上から目線、「先生」は人として先に生まれた人。立場で関わっては、子どもとの心のかかわりはできない。

これらの言葉をまとめ、共通した意味のキーワードを挙げるとすれば「教師の自己開示」とであると考えた。そこで次に、「教師の自己開示」について考察していきたい。

5 「教師の自己開示」のおさえ

「自己開示」については、「カウンセラーが機に応じて自らの感情や考え(人生観)や生い立ちや現況を率直に表明することによって、クライアントとの関係をリアルな、生きたものにする。」(國分、1990)と定義されている。また、留意点として「①自分が今、何を感じているのかに注意を向けること。②その感情が自分の中にしっかりと根ざしたものか、単なる一次的な判別できること。③ある感情を相手への非難(例:君、態度がでかいぞ)や指示(例:大人の言うことはちゃんと聞きなさい)といった仕方ではなく、自分自身の個人的な感情として、そのままの形で相手に伝えること(例:僕、何となく君から無視されているような感じがするんだけど)。その方が押しつけがましくなく、相手に伝わりやすい。」とされている。また、「教師の自己開示」について、

國分康孝は「これからの教師は、学校社会にいかにしてリレーションを育てるかを考えねばならない。このときにまず教師に期待されるのは自己開示能力である。教師の自己開示が教育をヒューマナイズし、教育を活性化すると言いたいのである。」(國分、1997)と言い、さらに「自己開示的とは無用な防衛機制を働かさず生き方のことである。教師が自己を開示するから生徒も自己開示的になり(模倣するから)、教師に親しみをもち、教師の開示内容を参考にして自分の問題に対処しようとする。」としている。

また國分(1997)は「自己開示の内容は三つある。事実、価値観、感情の開示である。自己開示できない教師-教科のことしか語れない教師とはどんな教師か。自己受容の足りない教師である。自己受容の足りない教師が無理に自分を語ると「告白」「自己卑下」の雰囲気になるので、生徒の心を打たない。自己受容のできる教師が自己を語ると、その教師が自己を受容しているように生徒もその教師を受容できる。決してなめられたり幻滅を与えたりしない。そこで結論はこうなる。自己開示できるためには自己受容できる教師であること、そしてさらに付言すれば、普段から自分の、事実、価値観、感情を自覚(意識)していることである。」と述べている。

また、國分の提唱する「構成的グループエンカウンター」では、教師による導入部分での自己開示の重要性が強調され、合わせてシェアリングでの子どもの自己開示も重視されている。

以上のことから、「教師の自己開示」は人間関係づくりの授業に於いて、教師の子どもへのかかわりの中核的な要素であることがわかる。

6 考察

(1) 「教師の自己開示」の留意点

「教師の自己開示」の重要性を確認してきたが、院生や現場教員の言葉からは、自己開示をする時の謙虚さや勇気、ドキドキ感などの感情面も吐露され、互いに共感的な受け止めもできたと考える。一方で、留意点として次のような確認ができる。

ア 自己開示はパフォーマンスだけではない

座談会の主張やアンケートの回答から、「自己開示は決して教師のパフォーマンスや秘密あかしだけでは無い。」ことがわかる。特に座談会Ⅲの1つ1つの主張は(表5参照)、それを強く示している。また、アンケートのコメントからも、教師の謙虚さや子どもへの誠実さが如何に大切であるのかを伝えている。(表6参照)

ともすれば上手に子ども達と関わりを演じる教師の姿を見て、「自己開示がすぐれている。」と評価しがちであるが、そう見えても案外教師の一方的な自己満足である場合が少なくないのではないだろうか。このことは、多くの小中学校を訪問して「力のある教師」と評価されている教師から感じるところである。

もちろん、パフォーマンスは自己開示の要素であることは間違いない。しかし、その前提に教師の謙虚さがあるからこそ、子どもも謙虚に自分を見つめ、他者を受容することができるのである。自己開示はパフォーマンスではなく、教師自身が自分を表出

する際に謙虚であり誠実であることの方が子どもにとって効果的であると言えよう。

イ 教師の自己開示と純粋さ

座談会の中で、「教師が恥をかいたりうまくいかなかったりすると子どもが応えてくれる。」というような主張が複数あった。また、「教師が楽しいと子どもも楽しくなる。」という指摘も多かった。また、アンケート調査でも「素の姿」という表現があった。

つまり、調査の指摘にもあるように、教師が子どもを心から好いて、そして本当に自分が思っていることを、素直に子どもに伝えていくという純粋さを大切に子ども一人一人とかかわろうとすれば、子どもも同じように純粋さを返し、そういう気持ちで他者を見ようとするのだと思われる。したがって、教師の自己開示が純粋になされたことも、重要な条件であると言える。

ウ 小学校と中学校での「教師の自己開示」のちがひ

座談会で取り上げられているが、校種、学年によって自己開示の質は変わる。座談会では、「小学校教員の方が、実は自己開示しにくいのではないか。」という意見が多かった。そもそも小学校低学年に対して教師が自己開示したときに、どの程度効果があるのかについて検討した研究は見られない。小学校、特に中低学年については、自己開示についてあらためて検討する必要がある。

(2) 人間関係づくりの授業での教師のかかわり

さて、「人間関係づくりの授業の中での教師のかかわり」という視点で、主に「教師の自己開示」を中心に教師のかかわりについて振り返ってきたが、視野を拡げて2つの側面より教師のかかわりについてまとめてみたい。

ア 教師のかかわりの重要性

「人間関係づくりの授業において、教師のかかわり方は重要な要素である。」ということである。座談会Ⅱで指摘されているように、ともすると教師のかかわりがエクササイズの説明等に終始しがちな授業が多いが、人間関係を扱う内容であるからこそ、教師のかかわりは大切であり、その核となるのが「教師の自己開示」であろう。

イ 教科授業でも同様である

教師のかかわりは、人間関係づくりの授業に限らず、どの教科授業でも同様であるということが、院生より指摘されている。特に「教師の自己開示」は方法論以前の教師個々の「自分らしさ」を児童生徒に対して表現することであり、教科授業でもベースになる。教材や教示方法も大事な要素ではあるが、その前に教師が「一人の人間」として子ども達にどのように出現するのか、どのようにその授業場面で子ども達との間に肯定的な雰囲気やあたたかな人間関係をつくり出すのか、このことが満たされることが大切であると言えよう。

6 おわりに

現在、平成22年3月に高度実践専修を修了した現職院生の赴任校へ行き、修了生と大学教員とがTTで授業を行う企画を実行している。各学校のご理解により充実した時間を持たせていただいております。また校長他から教職大学院に対する高い評価もいた

だいている（事例⑤）。

しかし何よりも評価できることは、修了生本人が自分の子ども観・指導観（かかわり方）の変化を、子どもや同僚とかかわる中から実感しており、さらにそれを、管理職や同僚が認めている事実である。

一方で、現在のM2も入学時と比較して明らかに指導観・授業観や授業内容が変化してきており、M1についても、滞在校で授業を公開し評価してもらう取り組みを繰り返すうちに、自らの授業観を問い直そうとしようとしている。

この、実践を核にしたPDCAサイクルがさらに有効に機能するよう、今後とも授業実践一振り返りの機会を増やしていく予定である。

文 献

國分康孝 1997

『教師の使えるカウンセリング』 金子書房

國分康孝編 1990

『カウンセリング辞典』 誠信書房